

# 人間げんま紀行

## 4 香川編

### プロフィール

■1944年4月 高知市で生まれる。父は4歳の時病死  
 ■66年(21歳) 高知赤十字高等看護学院卒業。翌年、寒い所にあこがれて行った北海道大医学部付属助産婦学校を出ると東京都立中央病院勤務  
 ■71年(26歳) 中学で一つ上の夫、隆夫氏と結婚し茨城県日立市へ。4月、日立製作所高等看護学院教師  
 ■73年(29歳) 夫の転勤でNTT高松病院(当時は高松通信病院)へ。86年、講演活動を開始  
 ■97年(53歳) 12月、NTT高松病院を退職し、岡山市の三宅医院

に勤務  
 ■99年(55歳) 8月、「いのちの応援舎」設立

「地味な服は絶対イヤ。東京に行くとき生地問屋で美川憲一なんかと同じタイプを縫ってもらおう。そのお古が私のファンの間で奪い合いなんよ。」  
 夫は「私は地味。柄物なんか着ない」。32歳の娘と30歳の息子は高松市の保健所と福祉施設に勤務



山本夫妻。後方は源平合戦の屋敷

### やまもと ふみこ 山本文子さん(「いのちの応援舎」代表)



「謝辞を言ってくれた生徒代表と握手したら、手がキュッときつい。それで抱き締めてあげたら、今日の話良かった」と喜んでいた。その生徒たちと談笑。徳島県鳴島町・鳴島第一中学校

## 親が喜ばない、いのちはない

山本文子、六十歳。派手で有名。「要は最初のインパクト。髪もカラーと染め直す。講演は私を見た生徒たちの『すっげえ』で始まる。学校側はあまり喜ばんよ」  
 元NTT高松病院の産婦人科部長。取り上げた赤ちゃんは約二千人。その経験から「性」といものについて中学、高校、婦人会、お寺、農協、育児教室、こへでも行って話す。高齢者や熟年層には夫婦仲良くやるとるか」と「生き生き健康法」も。

### セックスには責任

「セックスってなあに? いやらしい? そう思ってる人かわいそう。セックスと聞いて笑うのは自分が生まれてきたことを笑うことになるんだよ。いのちが生まれる元であることを忘れちゃダメ。みんな下向いてたね」  
 徳島県鳴島町の鳴島第一中学校で講演が始まった。ラメ地の真っ赤な

服。かん高い声。山本は産師の経験語る。実習で赤ちゃんが生まれるのを初めて見て感動したこと。銀座の真ん中の産院に勤めた時、そんなことをするのは思いもよらなかった仕事。山本が最も心を痛める人工妊娠中絶のこと。  
 胎児は七、十週間で目と手の指ができる。それを器械でかきだすのが中絶手術だ。ある時、病院に高校生の男女がランランでやって来た。手術してくれよ。彼女のおなかの中にオレの子がいるんだ。山本は食ってかかると「簡単に言うな。中絶は、いのちを殺すことじゃ」  
 二人は怒って帰ったが、一週間後にまた来た。「婦長さん、赤ちゃん欲しいねと彼女が言い出し、ボクも欲しいと思いました」  
 「私は、いのちに関しては厳しいです」と山本。「人を愛することは相手と大事にする。セックスには責任が伴うことを知ってくださ」と中学生に語りかけた。

### お前は看護婦じゃ

桂浜に近い高知市で育った。小中学校では自閉症の女の子と一緒に一言もしゃべらない同級生が山本にだけは「うんこおしっこ」を自分で教えてくれる。二人は授業中でも教室の外に出ることを許されていた。男の子たちが「臭い」と言っていた。山本が「そんなこと言わない」と山本がやっつけた。それを見た中学校の校長先生が「山本、お前は看護婦じゃ。絶対なれ」と勧めた。

高松通信病院でパンチパーマの山本は昼、夜と仕事に追われていた。八六年のある朝、娘が「お母さん、今日も来れないよね」と聞いた。六年生の最後の授業参観日だった。寂しい思いをしている子も、何かにキヤンパに連れていくなと何かしなければ。山本は市主催のレクリエーション教室へ通い始める。

その宿泊研修で産師について尋ねた高1の男の子に「お母さんがお母さんの中から世の中に顔を出した時、一番最初に見るのが私の顔じゃ」と説明。翌朝、「山本さんの話は面白い。ちども話して」高校教師。講演活動のきっかけ。

その前年、NTT民営化で郵便局と電信電話公社の職域病院は統合の渦中に。少子化で産数が減ってつぶれかけ、山本は病院おこしの中心にいた。「看護日本」の目標

### 元気の素は感想文

北側に源平の古戦場、屋敷を望むマンション九階が現在の拠点。「いのちの応援舎」だ。以前は山本家の住まい。ここで妊婦・育児や思春期相談にも応じる。

講演は年二百回ほど。五月と十月はお断り。「地域で私のような人を育てたい」と二〇〇二年から、後期三日間ずつの「いのちの応援舎セミナー」を始めたからだ。「観光は国立公園の屋敷。食事は私の手作り。そういうものがたててほしい。助産師を中心に速くは北海道や熊本、沖縄から集まった養生は延べ百人になった」

「性を大切にするのは、いのちを大切にすること。性教育は、いのちの教育」と山本。出産の現場に立ち会った産師に学校からの講演依頼が増えているが、腹が立つたり落ち込んだりも。四国の中学で親相手に話した時、校長がほめまくるので「子どもにも聞かせたら」と言っと「いや、それは」と校長。「あれにはガツクリ。あんな何聞きよるんな、という感じだった」

そんな山本を元気づけるのは生徒たちの感想文だ。  
 「ド派手のおばちゃんか来て何を話さよ」と思った。そう思った私を許してください。というのもあったね。虐待する親は大嫌い。だけど、どの子も最後は「父さんと母さんが好き」と書く。親に向かっている叫びだよ。産みだくなかったとは絶対に言ってほしくない」と山本。  
 「お父さんも、お母さんも愛し合ってたんだよと言われた時、涙が止まりませんでした。とても心が軽くなりました。『あ自分は生まれて生まれてきた子なんだ』と思つて生まれてきたよかったですと思います。中三女子の感想だ」

鳴島町でも山本は出産の感動を力を入れて伝えた。「感謝なんかしたくない親いっぱいいるもんね。だけど、あなたが生まれた時は、みんな涙を流して喜んだ。親が喜ばない、いのちはない」  
 (敬称略、編集委員・平野有登) 同時掲載

### 「ふみこパパ」と追う夢 人間の一生看る施設を

山本その絶妙コンビで準備を始めたのが「いのちの応援舎」の事業化だ。メインはお産。赤ちゃんがオキヤンと泣く横で高齢者が一緒に住む。性教育セミナーや子育て支援も継続し、ホームヘルパー養成の学校も。訪問介護の拠点として地域にも出ていく。  
 「複合型で、お産を絡めたものは世界に一つ」と夫。「人間の一生の面倒を看る施設に。助産師、看護、福祉のプロとそろって。補助金なしで造りたい。私に会いたい思春期の子も相談に来れる場。お産のお母さんが来て、定年後いきこりのおっちゃんや痴呆になりかけたおっちゃん、いっちゃんか来て快適空間にしたい」と山本。